青森大学付属総合研究所紀要 Vol.24, No.2,13-20, March, 2023

【研究論文】

津軽における「ねぶた」の発祥

Origin of "Nebuta" held in the Tsugaru region

清川繁人

青森大学社会学部

Abstract

Various theories have been proposed regarding the origin of the Nebuta Festival held in the Tsugaru region. Among them, the theory that Tamuramaro Sakanoue started it during his conquest of Emishi and that warlord Tamenobu Tsugaru started it during a Bon Festival event in Kyoto have been rejected because the historical backgrounds do not match. Since many of the festivals held in Japan are thought to have originated in Kyoto, I investigated the people and processes that brought Kyoto culture to Tsugaru. As a result, It was found that the story featuring Tamuramaro Sakanoue was replaced by the rule of the Tsugaru region by Tamenobu Tsugaru, and that his vassal Yasunari Hattori brought the lantern event from Kyoto, which may have brought the nebuta to Tsugaru.

Keywords；Nebuta Festival, Tsugaru, Kyoto, Tamuramaro Sakanoue, Tamenobu Tsugaru, Yasunari Hattori, lantern

１．はじめに

日本における祭りの本質は「神や仏に感謝する」ことであり，その語源は「祀る」にあるとされる．それゆえ祭りの多くは神道または仏教の行事に由来し，例えば日本三大祭りに数えられる京都・祇園祭は京都市八坂神社が当時頻繁に流行した疫病の退散を祈り，また，平安時代前期に東北で起こった貞観地震などの疫病神による災害を鎮めるために始まったとされている．同様に大阪天満宮で行われる天神祭は禊祓，そして東京・神田明神の神田祭は戦勝祈願の祭りとされ，いずれも神への祈願が大衆化したものである．

一方，東北地方では江戸時代に天候不順が頻発し，干害や冷害，農作物の病虫害さらには疫病が特に夏季に発生することが多かった（福眞 2010）．そのため東北三大祭りの青森ねぶた祭，秋田竿灯まつり及び仙台七夕まつりは，豆の葉を川に流すことで邪気を払う「眠り流し」と呼ばれる古来から行われていた民俗行事から発展した七夕の一環で，旧暦七月七日に行われるようになったとされている（柳田 1936）．このため，日本三大祭りが神事として実施されたのに対し，東北三大祭りをはじめとする東北地方の多くの祭りは特定の宗教，宗派に属さず，七夕を原点とした民俗行事が発展したものと解釈されている

青森ねぶた祭については，明治時代以降多くの研究者が祭りの起源解明に取り組み，これまでに概ね三つの説が提唱された（宮田・小松 2000，弘前観光コンベンション協会・弘前ねぷた保存会 2019）．

一つは，坂上田村麻呂が蝦夷征伐を行う際，ねぶたを海に流して敵をおびき寄せたことに由来する説（坂上田村麻呂説），次に津軽為信が京都で行われていた盂蘭盆会で家臣の服部康成に命じて灯籠を作らせ，京都に人々に披露したことに因んだという説（津軽為信説）（木村 1937），そして上述の七夕に行われた「眠り流し」と仏教に由来する「灯籠流し」が融合して祭りに発展したという説（七夕起源説）である．史実では，坂上田村麻呂は現在の岩手県以南までしか北上していなかった点や，京都の盂蘭盆会を為信が見物した年代には服部長門守は家臣ではなかった点で，最初の二つの説は否定され，近年は残る七夕起源説が一般的に信じられるようになった．しかし，眠り流しは日本海側の地方で古くから実施されていた民間行事であり，なぜ津軽藩の公式行事としてねぶた祭りの起源となる灯籠行列が大規模で運行されるようになったかの経緯について，明確な説明がなされていない．

津軽藩の公式記録『弘前藩庁日記』から，眠り流しを最初に藩主が鑑賞したのが享保 5 年（1720），そして現代につながる町内会単位でのねぶた運行が始まったのは享保 7 年（1722）とされる（田澤 2006）．しかしながら，それらは藩主が見物した記録であり，藩主が見る以前については記録が残されておらず，祭りとして発展する以前に「ねぶた」の行事がいつから行われていたか明確な証拠が見つかっていない．そこで本稿では，民俗行事であり宗教的色彩を持った灯籠行事と，享保年間に藩の公的資金を投入し宗教色を排除し町民主体となった「ねぶた祭り」の２段階でねぶたが成立したものと考え，坂上田村麻呂と津軽為信との関連において前半の灯籠行事成立のプロセスを検証することにした．なお，江戸時代の記録では，祭りの名称が「祢（ね）むた」，「ねぶた」，「ねぷた」，「佞武多」などと記載されていることから，本稿では名称を統一して「ねぶた」と記載した．また，藩主居住地が「弘前」に改称されたのが寛永 5 年（1628）であるため、それ以降、藩の名称を「弘前藩」と呼称すべきだが、本稿では戦国時代～江戸時代初期の記載を多く含むため「津軽藩」に統一した．

２．坂上田村麻呂説

２－１．坂上田村麻呂と蝦夷征伐

ねぶたの起源「第一の説」は坂上田村麻呂が蝦夷征伐の際に始まったとする説である（小泉 1981）．平安初期の公卿だった坂上田村麻呂は延暦 16 年（797），桓武天皇より東北地方全般の行政を指揮する官職を全て合わせ持った征夷大将軍に任ぜられ，蝦夷征伐の任を担った．当時，東北地方には朝廷の支配下ではなかった蝦夷が「まつろわぬ民」として居住していたためである．延暦 20 年（801），桓武朝第 3 次蝦夷征討が実行され，坂上田村麻呂は首長アテルイ軍を破り蝦夷を征伐した．

様々な史実を総合すると，坂上田村麻呂軍の進軍は最北で志波城（盛岡）までで，青森県まで北上した記録はなく、多くは伝承である（佐々木 1981，星野 2014）．しかし，明治時代に入ると，坂上田村麻呂軍が青森の津軽地方に北上し，夜に蝦夷の人々をおびき出すために海にねぶたを流したのが後の灯籠祭りに発展し，これがねぶたの原型になったという説が提唱された．この坂上田村麻呂説はまたたく間に津軽地方に広まり，戦後，青森市で行われた「青森ねぶた祭」では，最も優秀なねぶた運行団体に「田村麿賞」を授賞するほど，この説は地域に浸透していった．

坂上田村麻呂説の原型をたどってみると，江戸時代初期に記された『東日流由来記』が最古の文献であるとされている．『東日流由来記』は津軽為信の津軽統一までの故事が記録され，藩政期のねぶた伝承が記載された史料として唯一であり最古の文献であるという．記載内容から寛文 2 年（1662）という成立年には疑いがもたれているが，江戸時代の初めには既にねぶたの行事が行われ，坂上田村麻呂との関わりを示唆した伝承が流布していたことを示している．

藤田によると（藤田 1976），『東日流由来記』のねぶたに関する記述は以下の通りである．

「桓武天皇の治世，勢州鈴ヶ山に大丈丸（大嶽丸）という悪党がおり，手下とともに京都の人々をおびやかし，金銀宝財を奪い取っていた．そこで，坂上田村麻呂に大丈丸を退治するよう勅令があり，これを知った大丈丸は，伊勢国鈴ヶ山（鈴鹿山）＝図１＝から日光山に逃げ，さらに津軽へと来て，蝦夷と手を結んで阿舎羅山に隠れ住んだ．坂上田村麻呂を恐れた大丈丸は外ヶ浜に逃げ，さらに平内山に立て籠もった．七月初旬，坂上田村麻呂軍は大丈丸をおびき出すためねぶたを作って

図１　滋賀県及び京都府内の「ねぶた」関連寺社及び地域（筆者作成）

船に積み，笛，太鼓，鐘，ササラで囃しながら，平内の海に流した．大丈丸は不思議に思って海に出た際，坂上田村麻呂に追われ，津軽坂に逃げたところを討ち取られた.」

現在青森市で行われているねぶた祭りの最終日（なぬか日）をねぶたの海上運行で締めくくるのは，こうした俗説に由来するものであろう．なお，「津軽坂」は現在の「鶴ヶ坂」の古地名と考えられ，戦国時代は浪岡北畠氏の領内だった．また，青森市横内の大星神社（妙見宮）に伝わる伝説では，坂上田村麻呂は津軽坂に隣接した行岳（なみおか）を本拠として大丈丸を討ち取ったとされている（小友 1934）.

２－２.『田村の草子』と『東日流由来記』

『田村の草子』は京都を中心として日本各地で語り継がれている坂上田村麻呂伝説をベースに室町時代に創作された物語で，藤原俊仁と田村丸俊宗を主人公とする 2 つの物語から成る（大川 1979）．後者を主人公とするストーリーでは，田村丸俊宗が鈴鹿御前なる天女を妻とし，夫婦で鈴鹿山の鬼神・大嶽丸を退治，その後は近江国で人々を拐う鬼・高丸を陸奥国の外ヶ浜（外の浜と記載）まで追撃する物語となっている（山田 2008）．この外ヶ浜へ追撃して悪徒大丈丸を討伐するまでの行動が『東日流由来記』における坂上田村麻呂の移動ルートと類似しており，『東日流由来記』のねぶた伝説は『田村の草子』をベースとして創作されたものと言って間違いない.

『東日流由来記』では，『田村の草子』における鈴ヶ山の大丈丸を追うルートに津軽地方の地名が加わり，主人公の田村丸俊宗を津軽為信に置き換えることにより，為信のサクセスストーリーとして持ち上げたのではないかと思われる．具体的に『東日流由来記』における坂上田村麻呂伝説と津軽為信の戦歴（『新編弘前市史』編纂委員会 2002）を時系列に比較すると次のようになる.

（１）東日流由来記→　鈴ヶ山（鈴鹿山）の悪党大丈丸は北上して阿舎羅山に隠れる
　　為信の戦歴　→　元亀 2 年（1571）5 月 5 日，阿闍羅山の近傍にある南部方の石川城を攻略
（２）東日流由来記→　大丈丸，外ヶ浜に逃亡
　　為信の戦歴　→　天正 13 年（1585）3 月，南部領油川城・横内城（いずれも外ヶ浜）攻略
（３）東日流由来記→　大丈丸，平内山に逃亡し，海に浮かべられたねぶたでおびき出される
　　為信の戦歴　→　戦国時代末期，為信が津軽と南部の藩境である平内領に進攻
（４）東日流由来記→　大丈丸，津軽坂（鶴ヶ坂）へ逃亡し田村麻呂に討ち取られた
　　為信の戦歴　→　天正 16 年（1588），飯詰高楯城を攻略し、津軽統一を達成

現在，平内町では『東日流由来記』に基づき，ねぶた発祥の地と称している（後藤 1999）．一方，前述のとおり青森市でも浅虫地区や大星神社，雲谷地区，浪岡地区にねぶた発祥伝承があるが（宮田・小松 2000），いずれも津軽藩と南部藩の戦国期における藩境であるか，もしくは南部軍との戦闘のあった地と考えられる．特に，青森市の大星神社のねぶた起源伝説は具体的で，坂上田村麻呂は耕田の獄（八甲田山，津軽藩と南部藩の藩境）の女首領・阿屋須と弟の副首領・屯慶を竹・木・紙で作った大きな人形と笛・囃子でおびき出し討ち取

ったという．この人形がねぶたの原型となったというものである．阿屋須が蝦夷の首領だったのに対し，屯慶は名前から仏教の僧侶と推定され，すなわち屯慶は和人であり，実際は大星神社の前身である横内妙見社の修行僧だったとも考えられる．

以上をまとめると，坂上田村麻呂によるねぶた起源説の原点となった『東日流由来記』は、坂上田村麻呂伝承を記した『田村の草子』と，津軽為信が起こした津軽藩と南部藩の戦歴が融合して創作されたと解釈される．

３．津軽為信起源説

３－１．甲賀流忍者・服部康成

ねぶたの起源「第二の説」は，津軽藩の重臣・服部長門守康成が津軽為信の命で始めたとする記録に基づいている．

服部康成の生い立ちは不明な部分があるが，津軽服部家に伝わる由緒書によると，服部康成は徳川家康に仕えた服部半蔵正成の庶長子として伊賀で生まれたとされている．その後，関ケ原の戦いにおける大垣城攻めの際，津軽為信に召し抱えられた後，忍術で大垣城に忍び込んで西軍をかく乱し，東軍の勝利に貢献した．この功績を称え，徳川家康から「康」の一字を賜わり，これに正成の「成」を合わせて康成を名乗ったと伝わる（『津軽服部家由緒書』，『津軽一統志』，『津軽藩旧記伝類』）．慶長 12 年（1607）12 月，幕府の命で外様大名の監視役として 2 代藩主・津軽信枚が江戸から津軽へ下向するのに付き添い，付家老となった服部康成は，後に津軽藩の筆頭家老となり，津軽藩から 2,000 石，幕府から 1,000 石拝領した．

津軽藩の記録では，服部康成は「元ハ甲賀忍の達人なる」と記されている（『愚耳旧聴記』ほか）．一般に伊賀生まれの忍者は伊賀流であるが，甲賀には伊賀服部家と同族の甲賀服部家が甲賀 53 家に属しており，伊賀で生まれた後，甲賀に養子に出され育ったことから甲賀流の忍者になったものと推定される．

甲賀流忍者の特徴として，甲賀には修験道の開祖・役小角が開山したと伝わる修験道の聖地で，天台宗，真言宗の影響を受け飯道権現が信仰される飯道山があり，全国から修行のために集まった山伏たちとともに忍者が山に籠って同様の修行をしていたとされる（山田 2023）．また，忍者の一部は里山伏となって里の人々に加持祈祷を行い，お守り札や薬を売り歩きながら，日本各地で諜報活動をしていたとみられる．津軽服部家には，服部康成が使ったと思われる法螺貝が伝わっており，服部康成自身が他の甲賀流忍者と同様，山伏を兼務していた可能性が示唆される．

慶長 17 年（1612），甲賀の飯道山から修験道当山派の山伏・永尊が修験道の総本山である大行院の司頭として招かれ，津軽の山伏を統括した（『新編弘前市史』編纂委員会 2003）のも，家老として人事権のあった服部康成が，元は飯道山で修業した甲賀流忍者であったことからであろう．津軽の里山伏も，病気で困った人を加持祈祷したり薬草から薬を作り施薬したほか，獅子踊りなどの郷土芸能を村人に伝授するなど，村の生活に溶け込んでいた．江戸時代中期以降，獅子踊りがねぶた祭りに参加していたとの記録もあり（田澤　2006），津軽におけるねぶたのルーツに修験道の影響が見て取れる．

３－２．津軽偏覧日記

現代のねぶた祭りにつながる大灯籠を作成したと記載される最初の文献は『津軽偏覧日記』（木立 1793）である．これによると，文禄 2 年（1593）7 月，津軽為信が京都に滞留中に開かれた盂蘭盆会で，津軽為信は重臣・服部康成に命じ，津軽のお国自慢の一つとして 2 間 4 方の大灯籠を作らせ，京の町を練り歩いた．これが「津軽の大灯籠」と遠国にまで大評判 となり，国元・弘前でも行なわれるようになった，というものである．

この文献は津軽為信の京都滞在から数えて 200 年後の作であり，歴史学では 2 次史料として信頼性の乏しいものとされる．事実，服部長門守が津軽為信の家臣となったのは関ケ原の戦いが行われた慶長 5 年（1600），または津軽藩 2 代藩主・津軽信枚の後見人として弘前（当時高岡と呼称）に追従した慶長 12 年（1607）のいずれかとされることから，長門守は文禄 2 年には為信に召し抱えられていなかった点で時代錯誤がみられる．

３－３．服部康成と灯籠祭り

服部康成は 3 代にわたり津軽藩主に仕え，筆頭家老として藩主を補佐し，江戸時代初期の津軽藩の基盤づくりに重要な役割を担った．その間，天

守の創建や禅林街の整備，南溜池の造成，青森開港などに関わり，また百沢寺（現岩木山神社）の楼門や長勝寺三門建立の作事奉行を担った．甲賀流忍者であり，かつ山伏でもあった服部康成が，家老職として山伏を統率し寺院建築の任を担う中で，護摩祈祷や落成式典の場で灯籠行事を実施したとしても不思議ではない．

津軽偏覧日記の記載には，享保年中，大灯籠はお金がかかるので棟方作右衛門によって中止されたとある．弘前藩庁日記にも享保十二年(1727 年)，棟方作右衛門が財政改革のため藩主のねぷた高覧を中止したと書かれている．棟方作右衛門はこの頃，表書院番頭と用人を兼帯し，同時に裏の役職として甲賀流忍者集団「早道之者」の支配者も兼務していた．享保の頃，棟方作右衛門は修験道に由来するお山参詣に手下の早道之者を派遣していた記載が散見されることから，「早道之者」の支配者は山伏や忍者を動員した責任者として，ねぶたの催行においても深く関わっていたとしても不思議ではない．

津軽偏覧日記は津軽為信のこれまでの功績を称えるため，在京時に「津軽の大灯籠」を披露したと記載したが，実際は為信の家臣である服部康成が，津軽為信の没後京都で見聞した灯籠行列を何らかの行事に単発的に実施した，というのが正しいのではないだろうか．

３－４．津軽藩初期の行事

服部康成が津軽で灯籠行事としてねぶたを運行したとすれば，彼が没するまでの間に行われた数々の宗教関連行事や大規模な土木工事で大灯籠を披露した可能性が高い．『弘前藩庁日記』の記録が始まった寛文元年（1661）6 月 3 日以前，特に弘前城が焼失する寛永 4 年（1627）までの文書はほとんど残っていないため，この時代，行事内容を詳細に記した記録はないが，下記の行事にて祈祷や各種式典とともに灯籠行事としてのねぶたが行われたと想像できる．

（１）慶長 16 年（1611），弘前城完成を祝う地神祭（地鎮祭）を開催．この時、京都の近衛家から獅子舞が派遣された．これが津軽獅子舞（松森町津軽獅子舞）の始まりとされる．
（２）森山弥七郎を開港奉行に命じ，寛永 2 年（1625），青森港を開港
（３）寛永 4 年（1627），地震の後干害と虫害が発生し，慶好院へ依頼して天災退散の修法（護摩祈祷）を実施
（４）国上寺（古懸山不動院）の「坐まり不動」が汗をかくと領内に不吉なことが起こるとされ，その際藩主が祈祷を命令
（５）寛永 4 年（1627）10 月 3 日，「坐まり不動」が汗をかいたその夜，雷火により弘前城天守が焼失
（６）服部康成を作事奉行に任命し，寛永 5 年（1628），百沢寺（岩木山神社）楼門を建立
（７）寛永 5 年(1628)，天台宗・天海僧正の助言で，修験者や忍者の呪文「九字護身法」から 1 字「前」を引用し，「高岡」の地名を「弘前」に改名
（８）服部康成を作事奉行に任命し，寛永 6 年（1629），長勝寺三門を建立

４．粟田神社・田村神社起源説

４－１．粟田神社と祇園祭

前章に示したとおり，『津軽偏覧日記』に掲載された服部康成の記録は，彼が津軽家へ召し抱えられた時期と一致しない点で信頼性に欠けている．しかしながら，服部康成が津軽藩で筆頭家老として藩政を担い，その中で作事奉行として寺社の建築に深く関わっていたことなどから，ねぶたと京都の寺社行事との関係性を論じてみたい．

『津軽偏覧日記』には，文禄 2 年（1593）7 月，服部康成が津軽為信の命により津軽のお国自慢である 2 間 4 方の大灯籠を作り，京の町を練り歩いと記載されている．一方，戦国の公卿山科言継が記した『言継卿記』に「粟田の風流では大きな灯呂が二十あり，その大きさはおよそ 2 間 4 方もあり前代未聞のことで大変驚いた．」と記している．山科言継の生年は永正 4 年（1507）4 月 26 日～天正 7 年（1579）3 月 2 日であり，彼が 60 歳の時に粟田神社の風流行事で 2 間 4 方の灯籠が青蓮院までのルートで運行していたのを鑑賞している．

京都・粟田神社は，明治時代以前，疫病退散の神として広く信仰を集めている牛頭天王を祀っていたことから粟田天王社とも呼ばれていた．粟田神社では古くから神輿渡御の祭礼を行う際，悪霊を鎮める祭具として剣鉾が先導していた．貞観 11 年

（869）には都で疫病が大流行し，さらに陸奥の国で大津波を伴った貞観地震が起こり，全国的に社会不安が深刻化した．そこで，粟田神社に隣接する八坂神社では，粟田神社の祭礼で用いられる 66 本の剣鉾に諸国の悪霊を移し宿らせることで穢れを祓い，牛頭天王を祀り御霊会を執り行った．これが祇園祭の起源とされる（神道国際学会 2015）．

山科言継が記した粟田神社の灯籠行事（粟田大燈呂）がいつから始まったか明確な記録は見つかっていないが，平安時代以降，祇園祭が山車祭りとして京都を代表とする祭りに発展し，一方八坂神社に近接した粟田神社でも，牛頭天王を祀る灯籠行事として粟田大燈呂が京都の町に定着していったと思われる．粟田大燈呂が青森ねぶたのルーツではないかと捉え，平成になって中止となっていたまつりが復活され，京都芸術大学の学生がねぶたの制作を教材として扱っている（本間 2014）．

祇園祭宵山にみられる駒方提灯の灯りや祇園囃子，曳き方，車方などの運行スタイルはねぶた祭りと類似しており，また，粟田大燈呂も『津軽徧覧日記』に記載される灯籠と同じサイズである．本論続編では、享保五年（1720）七月六日の弘前藩庁日記に、「五代藩主・津軽信寿が新寺町の報恩寺でねぶたの「眠流」をご覧になる.」との記載から、報恩寺近くに建造された弘前八坂神社（大圓寺別院 牛頭天王）の祭礼行事がねぶたのルーツであるとの仮説を提示する。ここから，牛頭天王に祈願して穢れを禊ぎ払いする信仰が根本となっている点でねぶた祭と京都の二つの祭りが共通で，ねぶた祭が宗教行事ではないとされている解釈が誤りということになる．

４－２．山伏と粟田神社

京都市東山区粟田口地区には，粟田神社，尊勝院，青蓮院が隣接している．前述の通り，かつて粟田神社は祭神を牛頭天王とする粟田天王社だった．また尊勝院は第 18 代天台座主で，比叡山中興の祖として知られる元三大師を本尊とした天台宗の寺で，青蓮院の塔頭である．尊勝院は大正時代に現在地へ移転したが，それ以前は青蓮院の三條白川坊の後背地にあったという．尊勝院の歴代住職は多くの社寺の別当職も兼務し，江戸幕府が開かれて間もなく，徳川家康の台命により正式に近江多賀大社の別当職となり，その別当寺不動院も兼帯した（多賀神社 1933）．甲賀の修験者や忍者たちは不動院の支配下にあったため，京都・粟田口の三つの寺社と深い関連があり，寺社の祭りを見物したり，あるいは運営に参画していたとしても不自然ではない．

４－３．征夷大将軍・坂上田村麻呂を祀った神社

弘仁 3 年（812）の正月， 嵯峨天皇は勅令を出して征夷大将軍・坂上田村麻呂を祀る神社として，滋賀県甲賀市に田村神社を創建した（桐村 2012）．この地に坂上田村麻呂が祀られたのは，坂上田村麻呂が伊勢国鈴鹿山で山賊の大嶽丸を退治したことで，旅人や地元の人々に大いに感謝されたという伝承に由来する．室町時代になって創作された『田村の草子』の壮大なストーリーは，この神社の伝承が発祥と伝えられ，江戸時代になって津軽為信のサクセスストーリーと合体した．

同神社では，弘仁 3 年（812）正月，あらゆる農作物が実らず，疫病が流行して世の人々が苦しんでいたため，坂上田村麻呂の霊験を以て災厄を祓うよう「厄除大祭（田村まつり）」斎行の命令が嵯峨天皇より下された．3 日 3 晩にわたる大祈祷が執り行われたところ，災い事は見事に治まったと伝えられる．以来，毎年 2 月 17 日～19 日の 3 日間，厄除大祭が連綿と続けられ，現在に至っている．厄除大祭では様々な神事が行われ，厄除け祈祷のほか，年齢の数の豆を境内に流れる御手洗川の橋から落とす厄豆落しなどの厄払いの神事が行われ，多くの参拝者で賑わう．ねぶたのルーツである「眠り流し」は，マメ科のネムノキ（合歓の木）の枝と 大豆の葉を川に流して邪気を祓う七夕行事であり，豆を利用する点で厄除け祈祷との共通性を垣間見ることができる．

田村神社では祭神の坂上田村麻呂の御霊を慰め，功績を顕彰する祭りとして創始された夏祭り「万灯祭」も催行している．祭りでは，境内に氏子・崇敬者から献灯された約 9000 灯の提灯が飾られ，幻想的な雰囲気に包まれる．田村神社で行われる万灯祭，厄豆落し，田村の草子さらには粟田大燈呂における 2 間 4 方の大灯籠が服部康成や甲賀の山伏らによって津軽にもたらされ，これらが有機的に再構成してねぶたの起源となったとするのが，新たに提唱する「粟田神社・田村神社起源説」である．

５．おわりに

これまで「ねぶた」の起源について諸説提唱されてきたが，七夕行事の発展形であること，また京都にゆかりのある人々が始めた可能性があること以外は，確固たる証拠は見出されなかった．本稿では，これまで否定されてきた坂上田村麻呂説と津軽為信起源説について再検証し，それぞれの説に隠された真実を洗い出す作業を行った．その結果，坂上田村麻呂説は戦国時代に津軽為信が南部軍と戦った足跡と御伽草子『田村の草紙』のストーリーをオーバーラップさせていること，そして津軽為信起源説には甲賀流忍者だった家臣の服部康成が，津軽に京都の八坂神社や粟田神社，甲賀の田村神社で行われた灯籠行事を津軽に導入した可能性があることを提唱した．

松木明知は，「ねぶた」が現代のような「祭り」の形態になったのは享保 7 年（1722）のことで，京都から招かれた藍染職人が弘前の織座に居住し，京都の灯籠行事を始めたことが起源であるとする「織座起源説」を提唱した（松木 2006）．しかしながら，京都または近江方面から弘前に移住した人々には，慶長年間に 2 代藩主・津軽信枚の下向に同伴した服部長門守がおり，さらに津軽へ流罪となっていた花山院忠長もいた．花山院忠長は，後陽成天皇の女官と密通した罪（猪熊事件）の当事者で，はじめ松前藩に送られ，後に津軽藩に配流されて 22 年間もの間，津軽で過ごした（本田 2007）．この間，忠長は長門守へ赦免を願い出る手紙を送っており，二人の交流は密接だったようである。現在もその手紙は津軽服部家に所蔵されている．なお，忠長が松前に向けて京都を発つ日，忠長の父母は粟田口まで着いて行き，別れを悲しみ号泣したという（福島町史編集室 1995）．忠長にとって，粟田は忘れられない地となっていたに違いない．長門守は忠長を慰めるため，粟田大燈呂を再現したとの仮説も成り立つ．

上記二人に加え，津軽為信も戦国時代から頻繁に京都の公家，近衛前久や西洞院時慶との交流を重ね（『新編弘前市史』編纂委員会 2003），京都の文化を吸収していた一人で，津軽為信または子の津軽信枚と服部康成が，津軽の地で「ねぶた祭り」に繋がる京都生まれの灯籠行事を行ったとする仮説は十分に成立しうるものである．冒頭に述べたように，ねぶたの起源を考えるにあたり，民俗行事として「眠り流し」や「ねぶた」が始まった第１段階と，それが藩主導の行事として毎年行われるようになった第２段階に分ける必要があろう．今回は第１段階のねぶた成立過程を考証したが，いかなる過程で規模が巨大化した「ねぶた祭り」に移行していったのかについては，今後の論文で明らかにしたい．

参照文献

大川吉崇（1979）『鈴鹿山系の伝承と歴史』，新人物往来社（新書版『鈴鹿山系の伝承と歴史』伊勢文化社，2003）

小友叔夫（1934）「大星神社（妙見堂）の宝物鬼面と女曾阿屋須の伝説」，うとう 7 号

木立要左衛門藤守貞編（1793）『津軽偏覧日記』

木村捨三（1937）「ねぶた起源に関する一考察」，うとう 20 号

桐村英一郎（2012）『熊野鬼伝説ー坂上田村麻呂 英雄譚の誕生』，三弥井書店

小泉威士（1981）「民間伝承と史実--坂上田村麻呂将軍の伝説と史実を中心として」，日本民俗学 137, pp. 32～40

後藤秀次郎（1999）『平内町ネブタ発祥の地』，平内町郷土研究会

佐々木孝二（1981）「北奥羽の歴史における伝承の位置 －文化論的視点よりー」，弘前大学國史研究，77, pp. 1-19

神道国際学会（2015）『神道フォーラム 50』

『新編弘前市史』編纂委員会（2002）『新編弘前市史　通史編２（近世１）』

『新編弘前市史』編纂委員会（2003）『新編弘前市史　通史編３（近世２）』

多賀神社（1933）『多賀神社史』

田澤正（2006）『半穂独言集２ 史料にみる「ねふた」－叱られてばかりいた昔のねふたー』，北方新社

福眞吉美（2010）『弘前藩庁日記ひろひよみ ： 気象・災害等の記述を中心に』Vol. 1, Vol. 2, 北方新社

福島町史編集室（1995）『福島町史　第 2 巻通説編（上）』

弘前観光コンベンション協会・弘前ねぷた保存会（2019）『弘前ねぷた本』

星野岳義（2014）「坂上田村麻呂に関する伝承ー菅江真澄の採集を素材にしてー」ソシオサイエンス，20, pp. 100-114
本田伸（2007）「森林助宛の二通の書簡ー花山院忠長の津軽滞在をめぐってー」，弘前大学国史研究 123, pp, 35-40
本間正人ほか（2014）「大学新入生の創造力と人間力を引き出す体験学習--マンディ・プロジェクト，ねぶたプロジェクトの意義を総括する」，京都造形芸術大学紀要/Genesis, 18, pp, 199-207
松木明知（2006）『「ねぷた」ーその起源と呼称ー』，津輕書房
宮田登，小松和彦（2000）『青森ねぶた誌 青森市』
柳田國男（1936）「眠流し考」，『定本柳田國男全集』第 13 巻，筑摩書房
山科言継（1567）『言継卿記』永禄 10 年 7 月 24 日条
山田雄司（2008）「鈴鹿峠と坂上田村麻呂」，三重大史学，8, pp. 1-14
山田雄司（2023）『忍者学大全』，東京大学出版会

引用文献

藤田本太郎（1976）『ねぶたの歴史』弘前図書館後援会

Origin of "Nebuta" held in the Tsugaru region

Shigeto KIYOKAWA

Faculty of Sociology, Aomori University

要　旨

津軽地方で開催されるねぶた祭りの起源については，これまで諸説提言されてきた．なかでも坂上田村麻呂が蝦夷征伐をする際始まったとする説や，戦国武将の津軽為信が京都のお盆行事で始めた説は，時代背景が一致しないことから否定されている．日本国内で行われている多くの祭りは京都が起源と考えられていることから，京都文化を津軽へ持ち込んだ人々とそのプロセスを調査した．その結果，坂上田村麻呂を主人公とした物語が津軽為信による津軽地方支配に置き換わったことと，津軽為信の家臣 服部長門守が京都から灯籠行事をもたらしたことにより，ねぶたが津軽へもたらされた可能性があることを見出した．

キーワード：ねぶた祭り，津軽，京都，坂上田村麻呂，津軽為信，服部康成，灯籠